

(報告書)

## 嗜好品と移民コミュニティ

### —カートがつなぐ／断絶するエチオピアにおけるイエメン人社会—

助成研究者 大坪玲子 (東京大学大学院)

#### 1. 研究目的

カートはイエメン及び東アフリカで栽培・消費される嗜好品で、その新芽を噛むと軽い覚醒作用が得られる。娯楽施設が少ないイエメンでは、カートを噛んで気の合った人々と過ごす午後のひとときは、社交の機会となっている。申請者はこれまでイエメン共和国で聞き取り調査を実施し、カートの生産・流通・消費の特徴を明らかにした。カートは結衆、つまり人々を結ぶ手段として機能する。しかし 1970 年代のようにコミュニティ全員を参加させるほどの結衆の効果はなく、個人的な楽しみも許されるなど消費形態は多様化している[大坪 2005]。本研究ではエチオピアのイエメン系移民がカートの消費を通して誰とつながっているのか(そして誰とつながっていないのか)を、聞き取り調査を中心に明らかにする。

#### 2. 研究方法

エチオピアで聞き取り調査を行う。イエメンからエチオピアへの移民の歴史は古いが、主に 20 世紀以降に移民したイエメン系移民を調査対象とする。彼らが誰とカートを噛むのか、そして誰とカートを噛まないのかを聞き取り調査によって明らかにする。彼らの出身地、移住した年、国籍、職業、どこでどのように誰からカートを購入するのか、どこでいつ噛むのかということにも目を配る。聞き取り調査の対象はイエメン系移民に絞るが、彼らがエチオピア人とつながりを持っているのならば、そのつながりもたどる。

#### 3. 研究成果

2016 年 8 月 10 日～9 月 10 日にエチオピアでイエメン系移民を中心に聞き取り調査を行った。筆者が聞き取り調査を行った都市はジンマ、ナザレト、ディレ・ダワで、いずれもムスリム(イスラーム教徒)の割合が高い。各都市の特徴は以下のとおりである。

【ジンマ】エチオピア南西部にあるカファ州の州都。19 世紀にムスリム・オロモの王国が興った。

【ナザレト】アディス・アベバから南東約 75km にあるオロミア州の州都。オロモ語ではアダマという。

【ディレ・ダワ】アディス・アベバ東部にあり、1902年にジブチからアディス・アベバまでの鉄道を敷くために作られた都市（現在鉄道は操業停止）。エチオピア第2の都市。

### 3-1 エチオピアの宗教と民族

キリスト教は4世紀に阿克苏ム王国の王に受け入れられて以来、1974年に帝政が崩壊するまで、とりわけエチオピア北部に栄えた王国を支えた。王国の支柱となったキリスト教（エチオピア正教会）は東方正教会の中でも東方諸教会に分類される<sup>1</sup>。イスラームは8世紀以降に海岸部から広まった。10世紀までムスリムは海岸部に限定されていたが、10世紀以降、ムスリムは内陸に進出し始め、王国も成立した[石原 2014-c: 100]。

エチオピアは多民族国家であり、80以上の民族がいる。2007年の国勢調査によるとオロモが34.4%、アムハラが27%、

ソマリが6.2%、ティグレが6.1%、シダモが4%、グラゲが2.5%である。

宗教と民族の関係を見ると、アムハラはキリスト教徒、ソマリ、アファル、ハラリ、アルゴッパはほぼ100%がムスリムであるが、エチオピア最大のムスリム人口を抱えるオロモは、その5割くらいしかムスリムになっていない[石原 2014-c: 92]。2007年の国勢調査によるとキリスト教徒が63%、ムスリムが34%で、それ以外に在来のアニミズムや呪術、精霊崇拜などが信仰されている[石原 2014-a: 4]。

エチオピアでは宗教を問わずエチオピア正教会が規定する1年=13ヶ月からなるエチオピア暦と、独特の時刻法（午前7時を1時とする）を採用している（ムスリムはイスラーム暦も併用する）。エチオピア正教会は、征服者=支配者=搾取者の宗教であり、エチオピア正教会への改宗は、国家への服従を意味するとされた。逆に被征服民の側からすると、エチオピア正教会への改宗を拒み、カトリックやプロテスタント系のキリスト教、さらにはイスラームを受け入れることは「非服従」の意思表示となった[石原 2014-b, c]。



<sup>1</sup> 東方諸教会（Oriental Orthodox Churches）は、イエスの両性論を是とし単性論を非とした451年のカルケドン公会議において否定されたことから「非カルケドン派」と類別される。同派にはエチオピア正教会の他、シリア教会、インド教会、アルメニア教会、コプト教会も含まれる。エチオピア正教会はユダヤ教的な要素（豚肉忌避、土曜日の安息、割礼など）も保持している[石原 2014-b: 26-27]。

### 3-2 エチオピアのカート

エチオピアはカート<sup>2</sup>の原産地といわれるが、長い間生産地や消費者は限定的なものであった。20世紀以降にカートの生産、消費が拡大した。その理由は輸送網の整備、消費者層の増加、輸出量の増加が考えられる。1902年の鉄道開発、1920-30年代の道路開発、1940年代の空路開発によって、カートはエチオピアの主要な換金作物となった。カートは何世紀にもわたってエチオピアのハレルゲやオロモ地方で栽培されてきた。現在では北部のバハルダール市とその周辺や、南部のシダマやグラゲ地区でも生産、消費は拡大している[Anderson et al. 2007: 13]。1991年に農業開発戦略(Agricultural Development-Led Industrialization)が始まり、農作物の生産量と作付面積の増加が期待されたが、穀物の国内価格は下がり、コーヒーの国際価格も下がる中、カートの生産量と作付面積は増加した。国内外の需要が飛躍的に増加したことに加え、病害に強く、限界耕作地(marginal lands)でも栽培ができ、労働力の投入が少なくて済み、収穫回数も多いからである[Anderson et al. 2007: 14]。

エチオピアのカートは伝統的にムスリムと関連してきた。宗教指導者がイスラーム暦のラマダーン月(この1ヶ月間、日中の飲食が禁止となる)に夜間起きているためにカートを噛んだり、長距離を移動する商人が噛んだり、農民が活力を求めて噛んだりした。ムスリムの女性はカートをほとんど噛まず、またキリスト教徒は一般的にこの実践を避けた。20世紀の半ば以降に輸送手段が発達し、階層、宗教、民族やジェンダーを超えてカートを噛む習慣が広まった[Gebissa 2010-a: 1-2]。

1980年代に「アフリカの角」からの難民が、カートの慣習を世界に広めた。世界中で500~1000万人がカートを噛んでいると見積もることができる。エチオピア国外でのカート需要の増加に見合うよう生産量が増加した。1999年にカートはエチオピアでコーヒーに次いで2番目に外貨を稼ぐ輸出品となった[Gebissa 2010-a: 2-3]。

カートの生産や消費の増加に対し、批判的な意見も出てきた。生産増加に関して、食料の安全保障や自給自足的な農業への影響が指摘される。しかしエチオピアのカートは限界耕作地で栽培でき、技術や労働力の投入も最小で済み、病害にも強い。カートからの現金収入のおかげで農民は食料の安全保障が達成できる。その収入は地方政府に税収の増加をもたらし、国には輸出による外貨の純収益をもたらした[Gebissa 2010-a: 3-4]。

カートの消費増加は、消費者による怠惰、暴力、文化的墮落、あるいは国の生産性や国民の健康への影響[Gebissa 2010-a: 5]、失業の原因と結果[Mains 2010: 29]、家計や家族関係の悪化、カートが他のドラッグへの入り口となる[Gebissa 2010-c: 70]などと批判されてきた。さまざまな批判に対し、Gebissaはカートを集団で噛むことで寛容、喜び、友好に満ちた社会的調和の雰囲気を生み出す[Gebissa 2010-c: 77]と主張している。カートが結

---

<sup>2</sup> エチオピアでカートはチャット、ジマー、ガルバボなどと呼ばれる。

衆つまり人々を結びつけると考えられるのは、イエメンのカートと同様である[大坪 2005]。

イエメンのサナアではカートを消費する場所は主に自宅である。エチオピアではカートを消費する場所として自宅の他にカートハウスがある。カートハウスは主に都市部にあり、アディス・アベバやナザレト（筆者が確認）やジンマ[Mains 2010]にある。使用料を支払って利用するもので、カートを販売する店舗の奥に設置されているものと、店舗とは全く独立して場所だけ提供するものがある。

エチオピアのカートに関する先行研究には、地域的な特色に注目したものがある[Gebissa ed. 2010]。カートはオロモ、ソマリ、ハラリにとって他のグループとの相違を際立たせる社会的なアイデンティティの指標として機能している[Gebissa 2010-c: 75]。しかしイエメン系移民のカート消費に関して、先行研究では言及されてこなかった。

またカートだけが注目され、他の嗜好品（コーヒー、紅茶、タバコ、アルコール飲料）との関係はほとんど議論されてこなかった。午前中から居酒屋に居座る男性の姿は、アルコール飲料が禁止されているイエメンで調査を行ってきた筆者にはかなり異常な状態に思えるのだが、アルコール摂取に関して、エチオピア研究者の間ではあまり問題視されていないようである。

### 3-3 イエメン系移民の研究

#### 3-3-1 イエメン系移民の先行研究

インド洋海域に広がるイエメン系移民の研究の特徴は3点指摘できる。①東南アジアへの移民が注目されてきたこと、②ハドラマミ研究が多いこと、③サイド研究が多いことである。

イエメン系移民の論文集[Freitag & Clarence-Smith 1997]はヒジャーズ地方（メッカ、メディナを含むアラビア半島西部）も扱っているが、東南アジアへの移民に関する論文が多くを占めている。東アフリカを扱ったのは1本[Le Guennec-Coppens 1997: 157]で、概説的な記述にとどまっている。また Freitag[2003]はハドラマウトと移住先との関係を論じているが、移住先としては東南アジアとヒジャーズ地方が中心で、東アフリカは等閑視されてきた。

イエメン系移民の中で主な研究対象となってきたのはハドラマミである。彼らはイエメン東部のハドラマウト地方（現在はハドラマウト州）出身であり、インド洋海域に広く移住している。Freitag & Clarence-Smith[1997]のタイトルはハドラマミであり、Freitag[2003]のタイトルもハドラマウトという地名が用いられている。

インド洋海域に広がるイエメン系移民の中でもハドラマミの割合が多く、移民先によってはほとんどがハドラマミだけということもありえるだろうが、それ以外の地方出身者が全く存在しないというわけではないだろう。ハドラマミだけが注目されてきた理由はいくつか考えられるが、そのうちの1つが、サイド研究への偏りと関係している。

サイイドは預言者ムハンマドの子孫<sup>3</sup>であり、そのカリスマからイスラーム世界では現在でも一部の家系は政治的経済的な力を持っている。彼らは商人となって交易に従事したり、またイスラーム法の知識を生かして法曹になるなどして[Manger 2010: 96]、インド洋海域のイスラーム化を推進した。サイイドは集団としてのアイデンティティを保持する[Manger 2010: 130]ので、当然研究対象となりやすい。彼らは預言者に遡る系譜を文字通り有し、名乗り方からもその出自は明らかになる。Freitag[2003]も注目しているのはサイイドである。

特別な血統主義を採るサイイドが、家系を維持する意識の高いことは当然である。また故郷や親族とのネットワークというものは研究者にとっても見えやすく、インフォーマントにとっても語りやすいものである。「地元の女性と結婚し、地元のコミュニティに消えた者もいるが、多くは他のハドラマミとの関係を維持した」[Manger 2010: 4]とはいえ、「多く」かどうかは、「消えた」者の人数がわからないから、断定できないだろう。

ハドラマウト地方のサイイド以外の社会階層はマシャーーフ、部族民、「弱い人々」、アフダーム、アービド<sup>4</sup>などがあつた。インド洋海域にまず出ていったのはサイイドであり、その後に非サイイドの人々が出ていった[Manger 2010: 128-129]。非サイイドは長い系譜を持っているわけではなく、遠い祖先の名前も知らない。社会的な組織を築くよりも、ビジネスによってコミュニティを作る[Manger 2010: 142]。家系を維持する意識がサイイドほど高くなく、容易に現地社会に溶け込んでしまう可能性の高い非サイイドは、これまでのイエメン系移民の研究で等閑視されてきた。

イエメン系移民に限らず、アラブの移民研究は男性中心で語られる。移民はまず男性単身か男性親族（兄弟、父子、イトコ同士）で行われることが多く[cf. Le Guennec-Coppens 1997: 161]、父系出自原理からすれば、妻が誰であれ、その男性の子供は男性の社会に属するとみなされるからである。しかし原理上イエメン人とみなされることと、当の本人や周囲の人々がイエメン人とみなしみなされることとは乖離があるだろう。少なくとも上に紹介した研究では、アイデンティティの揺らぎに関しても議論されていない。揺らぎのないハドラマミ＝サイイドを中心に研究が進んできたからである。

---

<sup>3</sup> 父系出自の原理から厳密に表現すると、ムハンマドの娘婿アリーの子孫ということになる。ムハンマドには自分より長生きした息子がいないので、アリーがムハンマドに最も近い男性親族ということになり、古くからイスラーム世界ではアリーとその子孫を特別視する一種の血統主義が見られる。

<sup>4</sup> マシャーーフは預言者の系譜ではないが、歴史的に宗教的な地位を確立した人々、部族は父系出自集団であり、農業を行う（遊牧民は存在しないわけではない）。「弱い人々」は市場で働く商人や職人、アフダームは使用人、アービドはかつての奴隷の子孫である。Mangerは現在でもサイイドを頂点とする社会階層がハドラマウトに見られると考えているが、Lacknerは南イエメンの独立闘争[1963-67]やその後の社会主義政権時代[1967-90]にかつての社会階層は破壊されたと述べている[Lackner 1985: 107-108; Manger 2010: 128]。

### 3-3-2 東アフリカへの移民と先行研究

南アラビアからエチオピアへの移民は 16 世紀から、特にサイドたちによって行われた [Bezabeh 2016: 14] が、非サイドたちの移民はずっと遅れ、20 世紀に入ってからである。

東アフリカへの移民に関する研究が、近年相次いで刊行された [Manger 2010, Bezabeh 2016]<sup>5</sup>。Manger はインド洋海域に散在する（シンガポール、ハイデラバード、スーダン、エチオピア）ハドラミに注目した。時には北イエメン出身者に言及するものの、タイトルもハドラミに限定しており、インド洋海域に散在するハドラミのアイデンティティ保持がテーマである。Manger はハドラミがアイデンティティを保持することを当然視する。「サイド以外の人々は移民先でカテゴリーが再定義され、マジャーイフとみなされる傾向にある」 [Manger 2010: 130] とはいえ、Manger 自身、マジャーイフへの関心は低い。「ハドラミがソマリやオロモと婚姻関係を結んだり、北イエメン出身者と婚姻したりすることによって生まれる混合コミュニティを“劣っている”と考える者は、特にアディス・アベバにいるより“正しい”イエメン系コミュニティの者の中に存在する」 [Manger 2010: 103] という見解をただ紹介すること自体、Manger 自身がハドラミ＝サイド至上主義であることの告白になっている。

一方 Bezabeh はジブチとエチオピアのイエメン系移民を取り上げ、彼らのネットワークよりも、変わりゆく帝国や国家の体制と移民との関係に注目した [Bezabeh 2016: 4]。Bezabeh はエチオピア帝国や列強、その後成立したエチオピアやジブチ政府によって時に優遇、時に迫害されたイエメン系移民を具体的な個人の活躍を通して記述する。しかし国や移民コミュニティのために活躍する姿を扱うために、結果として一部の大商人や知識人の記述が多い。そのためにハドラミ＝サイドが中心となる。

### 3-3-3 イエメン系移民の迫害

キリスト教徒が政権を握るエチオピアでは、イエメン系移民はムスリムでありなおかつ移民という二重にマイノリティの立場に立たされた。以下にエチオピアにおいてムスリムとイエメン系移民が時の政権によってどのように扱われたのかということをもとめよう。

19 世紀半ばからヨーロッパ列強は東アフリカに進出した。フランスはジブチ港の整備を進め、イタリアはエチオピア皇帝メネリクに港湾から内陸への鉄道建設を合意させた。1902 年 12 月に鉄道はジブチからディレ・ダワに、1915 年にアディス・アベバに到達した。港湾整備や鉄道建設のためにイエメン系移民がやってきた。故郷での飢餓、貧困、紛争、暴君から逃れるためである [Bezabeh 2016: 19]。アディス・アベバとジブチを結ぶ鉄

---

<sup>5</sup> エチオピア以外の東アフリカへのイエメン系移民は、ジブチに関しては Bezabeh [2016]、それ以外（ケニア、タンザニア、コモロ、ソマリア、モザンビーク、マダガスカル）に関しては Le Guennec-Coppens [1997: 165] を参照。

道ができてからディレ・ダワは発展し、ハドラミは輸出入、小売、ホテル経営などに関わった。彼らは 1960 年代まで地元の市場を支配したが、その後ハデレ、オロモ、グラゲの商人がとってかわった[Manger 2010: 95]。

イタリアのエチオピア占領時代[1935-41]、イタリアは親ムスリムの政策をとった。イタリア人はアラブ民族をエチオピアの他の人々より文明化された人々だとみなしたからである[Bezabeh 2016: 55]。イタリアはキリスト教徒アムハラからの「解放」を掲げ、各地にモスクやイスラーム学校を建設し、メッカ巡礼を奨励し、シャリーア法廷を正式に設置した[石原 2014-c: 125]。

1941 年にハイレセラシエ 1 世[在位 1930-74]が復帰すると、皇帝は 1955 年改訂憲法において、エチオピア正教会を国教と定める一方で、個人の宗教信仰の自由を保証した。しかし政府は 1950 年代後半にムスリムの権利を奪う政策に転じ、ムスリムを重要なポストから排除した[石原 2014-c: 124-127]。これは 1948 年に建国されたイスラエルとエチオピア政府が親密な関係を持つようになったことと関連がある。1956 年の第二次中東戦争の勃発に表れる、中東ムスリム諸国におけるパン・アラブ主義の台頭は、エチオピアによる併合に反対するエリトリアでのエリトリア解放戦線(ELF)の設立という形で影響を与え、それによりエチオピア国内(とりわけエリトリア内)では、ムスリムの権利がますます剥奪された[石原 2014-c: 147 注 59]。ELF を支援したのがエジプトやシリア、エチオピアを支援したのがイスラエルやアメリカであり、アラブ民族のハドラミはエチオピア政府から迫害を受けた。また大ソマリア主義を唱えるバーレ大統領のソマリアとエチオピアとのオガデン戦争[1977-88]においても、ハドラミはエチオピア政府から「敵」とみなされた[Manger 2010: 98-99]。

1974 年に軍部と警察からなる合同委員会(デルグ)が政権を掌握し、憲法を停止するとともに、ハイレセラシエ 1 世皇帝は退位、処刑された。デルグ政権[1974-91]はマルクス・レーニン主義を標榜し、強権的な独裁体制が成立した。同政権はムスリムに対する恩恵的な施策を展開したが、政権中枢部にムスリムは選ばれず、ムスリムが大半を占める商人は急進的な社会主義路線のもとで「搾取者」「農民の敵」と糾弾された[石原 2014-c: 129]。ハドラミ商人は「資本家」と呼ばれ、多くは家や財産を没収され、反政府勢力とみなされた者は迫害された。イエメン系移民が支配的な役割を果たしてきた家畜交易、小売商売、輸送業はソマリ、ティグレ、グラゲなどがとってかわった。長期間にわたった迫害のため、イエメン系移民の中にはエチオピア市民となる者や、エチオピアを去る者もいた[Manger 2010: 100]。1980 年代まで、エチオピアを脱出するイエメン系移民は止まらなかった。ジブチを経由してサウディアラビアやカタール、あるいは UAE へ向かい、さらに西ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリアに移民した者もいた。イエメンに戻る者もいた。当時イエメンは南北に分かれていたが、南イエメンは社会主義政権だったので、多くは北イエメンを選んだ[Bezabeh 2016: 66-67]。

1991年にデルグ政権はデルグ討伐で共同戦線を張っていたエチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）、オロモ解放戦線（OLF）、エリトリア人民解放戦線（EPLF）によって倒された。1993年にエリトリアはEPLFの主導のもとで住民投票を実施し、エチオピアからの分離独立を果たした。1992年にOLFが非合法化されると、EPRDFが単独で政権を掌握した。同政権は1994年に発布した憲法で、信教の自由を定めるとともに、国家と宗教の分離を謳った。同政権は民族・宗教の多様性に立脚した国づくりを目指し、ムスリムはかつてないほどの自由と権利を手に入れたかに見えた。また同政権が採用した自由市場経済は、ムスリムが主要な職業としてきた商業や都市の民間企業に資する結果となった[石原2014-b, c]。

### 3-4 調査地におけるイエメン系移民の盛衰

エチオピアにはかつては多くのイエメン系移民が存在したが、長く続いた迫害のため現在では激減した。調査した都市でイエメン系移民のコミュニティがあるとはいいがたい。彼らもコミュニティがあると考えていない<sup>6</sup>。各都市での聞き取り調査を通して、イエメン系移民の盛衰を以下にまとめる。アディス・アベバではイエメン系移民からの聞き取り調査を行わなかったが、他の地域での聞き取り調査から情報を得たので、以下に項目を立てた。

#### 【アディス・アベバ】

帝政時代、イエメン人はアディス・アベバでハンマーリー（人足）をしていた。腰にベルトをして、荷物の背負い方が独特だったのでイエメン人だとわかった。イエメン人は大工や建築現場にもいた。今はグラゲがやっている。マルカート（市場）の商人もイエメン人がいた。彼らは農地をたくさん持っていて、スイカ、カボチャ、タマネギを作っていた。エチオピア人と自称するイエメン人もいた。1948年の中東戦争の時に当時の皇帝がイエメン人を追い出した。社会主義政権になると、エチオピアはソマリアと対立し、ソマリアを支援するイエメンとは敵対関係になったため、イエメン人は引き続き迫害された[ジャラル氏 8/12 インタビュー]。

#### 【ジンマ】

ジンマはイエメン人ばかりだった。ジンマにイエメン人は1000人いた。市場で働くのはイエメン人ばかりだった。70年前にハイレセラシエ1世がイエメン人を地方に追放した。中東戦争（1948年）で皇帝がイスラエルを支持したから（イスラエルの敵であるアラブ民

---

<sup>6</sup> Bezabehは2004年から11年間イエメン系移民コミュニティの研究した[Bezabeh 2016: ix]。その後のほんの数年でコミュニティがなくなってしまったのか、それとも彼と筆者のインフォーマントの認識の差によるものかは今後の課題としたい。



族のイエメン人が迫害を受けたの)だ。イエメン人はコーヒー、布、砂糖、油、レンズマメなどを扱う商人だったが、ジンマから去ってしまった。イエメン人の抜けた後はグラゲが埋めた。ジンマにはハンマーリーはいなかった[アハマド氏 8/16 インタビュー]。

現在はジンマにイエメン系移民は 5 軒ほど残っている。ハドラミのシェイバーニー、タイズ出身のカーイド、タイズ出身のサブリー、ホジャリヤ出身のアブドルハキーム。商人や工場経営などをしている[8/16 アハマド氏インタビュー]。

#### 【ナザレト】

昔ナザレトはイエメン人とソマリばかりだった。それを埋めたグラゲは商才に長けている[ジャラル氏 8/12 インタビュー]。社会主義政権の時代にイエメン人は去った。現在イエメン系移民は、ナザレトの中でも古いマルカートの一画で 4-5 軒集まって店舗を開いている[アブー・イスマーイール氏 9/7 インタビュー]。

#### 【ディレ・ダワ】

昔はこの通り（ワヒード氏の家のある通り）はイエメン人ばかりだったが、社会主義政権の前にみな去った。ハンマーリーのイエメン人は（アディス・アベバやナザレトにいたが）ここにもいた。とにかく仕事をするべきで、どんな仕事よりも物乞いよりましだ<sup>7</sup>。ハンマーリーはディレ・ダワでは鉄道に積むコーヒー豆などを運んだ。その後商人になり、金持ちになった者もいる。かつてディレ・ダワの男性はどの民族出身でもみなアラビア語を話した。現在はイエメン系移民は少なくなってしまったが、多くの男性がアラビア語<sup>8</sup>を話す[イード氏 8/25、ワヒード氏 8/27 インタビュー]。

現在ディレ・ダワに住むイエメン系移民は 5 軒ほどで、技師、雑貨屋、甘味屋などである。店舗や住宅が集まっているわけではない[イード氏 8/25 インタビュー]。

### 3-5 インフォーマントのライフヒストリー

#### 【ジンマ】

**アハマド氏：**イエメン料理レストラン経営兼コック。父がイエメンのイップ州（ハンマーム・ダムトのバニー・ヘイラーン）からエチオピアに移住した。アハマド氏はエチオピア生まれで、イエメン、サウディアラビアでの生活を経て 20 年ほど前にエチオピアに戻った。この時に国籍をイエメンからエチオピアに変更した。母と妻はオロモ。カートは平日は 1 人で噛む。日曜日は兄と噛むこともある。

1948 年に父がエチオピアへ来た。エチオピアに来る前は農業をやっていたが、イエメン

---

<sup>7</sup> この説明や、ナザレトでのキリスト教徒への聞き取り調査から、ハンマーリーが現地のエチオピア人から蔑視される職業であったことがわかる。

<sup>8</sup> イエメン方言に近いが、エチオピア風の表現も混じっている。

では貧乏だった。父は 40 歳で既婚だったが、兄弟と 2 人でイエメンのホデイダ港からジブチにわたり、エチオピアのハラル<sup>9</sup>へ入った。まず店の手伝いをした。エチオピアに知り合いはいなかった。

その後父は 55 年前にジンマへ移った。お金がないからアディス・アベバに行けなかった。アディス・アベバは物価が高かったが、ジンマは安かった。父の兄弟はハラルに残った。父はジンマで雑貨屋で油、砂糖、石鹼などを売って働いた。父はエチオピアで 2 回目の結婚をし、長男タウフィーク、次男（死亡）、三男アハマドをもうけた。アハマド氏は 1950 年代半ばにジンマで生まれた。

1967 年にハイレセラシエ 1 世に追い出されてイエメンに戻った。まず父と兄が、その後アハマド氏が 18 歳でイエメンへ戻り、故郷のハンマーム・ダムトでカート生産などした。その間にアハマド氏はイトコと結婚した。1970 年に父と兄と 3 人でサウディアラビアへ行き、4 年滞在した。東部ダンマームそばのフバルで、父はペプシ工場の警備員になり、兄弟は車工場で働いた。父はその後イエメンで死亡し、アハマド氏は兄とエチオピアに戻った。イエメンには仕事がなく、エチオピアに母親がいたからである。この時にパスポートをエチオピアにした。兄はイエメンのまま。その後ずっとエチオピアに住んでいる。母は 3 年前に死亡した。イエメンでの結婚で息子 3 人と娘 1 人を、ここでの結婚で娘 2 人をもうけた。妻はオロモで、レストランの名前は娘のうちの 1 人にちなむ。

ジンマでは 20 年近く木材加工工場で働き、3 年前にレストランを始めた。客はエチオピア人ばかりだ。兄のタウフィークは現在この木材加工工場を経営している。

アムハラ語とオロモ語はここで学んだ。アラビア語はイエメンで学んだ。父はオロモ語は人々から学んだ。兄のタウフィークはオロモ語が話せない<sup>10</sup>[8/15-16 インタビュー]。

## 【ナザレト】

**イスマーイール氏：**布地を販売。祖父がサナアからエチオピアへ来た。祖父も父も商人。妻もサナア出身。カートは日曜の午後に嘯む。

祖父がサナアからエチオピアへ来た。妻もサナア出身で、家ではアラビア語で会話をする。息子 2 人と娘 2 人がいる。アラビア語、アムハラ語、オロモ語を話し、英語も少々できる。カートは日曜の午後に少し嘯む。イエメンでもサウディアラビアでも生活したことがある。マテ

---

<sup>9</sup> ハラルはゼイラ港に通じる交易路沿いの町として 8 世紀に遡る歴史があるとされる。エジプトにファティマ朝[909-1171]が成立してから紅海交易が再興し、1216 年にヒジャーズからアバーディル・ウマル・リダーが 405 人の聖者とともハラルにやってきて、ハラル周辺の住民のイスラーム化に貢献したとされる[石原 2014-c: 111]。ハラルには現在イエメン系移民が 2 軒ほど残っているという情報をディレ・ダワで得たが、今回の調査では見つけられなかった。

<sup>10</sup> とはいえ木材加工工場で働いている者の中にはオロモもいるので、日常会話ができないということはあるだろう。アハマド氏、タウフィーク氏両方とも「できない」といったが、「苦手である」というニュアンスであろう。

イチョのカートを好む[8/21 インタビュー]。

**アブー・イスマーイール氏**：イスマーイールの父。布地を販売。カートは昔噛んだが、今はやらない。カートを噛むと考え事ばかりして子供の世話をしないし、妻と話もしないし、金もかかるから。

ディレ・ダワのカートはナザレトのより良い[9/1,7 インタビュー]。

**アブドルカーディル氏**：香料を販売。62歳。イエメンのタイズ州（ホジャリヤ地方）出身の父がエチオピアとイエメンで商売をしていた。午後に噛むと夜に眠れなくなるから、午前中にカートを噛む。

ホジャリヤ出身の父がイエメンとこちらを行ったり来たりしていた。母はエチオピア人。兄弟が3人、姉妹が2人いる。父は近くの墓地で眠っている。兄弟姉妹はみな帰国したが、自分はエチオピアに残った。自分の子供の2人はイエメン、1人はアメリカ、1人はジュネーブに住んでいる[8/22,9/2,6,7 インタビュー]。

**アリー氏**：アブドルカーディル氏の甥と一緒に香料を販売。父はエチオピア人。曾祖父がエチオピアとディレ・ダワで商売をしていた。カートは時々噛む。

ナザレト生まれ。アフラハと新婚。イエメンには1回だけ行った。アムハラ語、アラビア語、オロモ語、ソマリ語、ハラリ語がわかる。アラビア語は町で学んだ。グラゲ語とシルティ語は聞けばわかる。兄弟のムハンマド氏も店を手伝ったりしているが、未婚。

普段は店が忙しいのでカートはあまり噛めない。週末などに時々カートを噛む。週末でも疲れていると、カートを噛まずに昼寝をして過ごしてしまうこともある。マティチョが最高のカートだ。

曾祖父ウマルがアデンとディレ・ダワで貿易をしていた。アデンから腕時計などの商品を持って来て、エチオピアでコーヒーを仕入れた。曾祖父の妻はイエメン人でアデン在住だった。祖父の名はアリーでディレ・ダワ生まれで、父はエチオピア人で商人だった。母がアブドゥルカーディルの姉妹である[8/22,9/1,2,7 インタビュー]。

**アフラハ**：アリーの妻。ハドラマウト出身で、ディレ・ダワから嫁いできた。アラビア語、アムハラ語、オロモ語、ヒンディー語、英語ができる。商売を手伝うこともある。兄弟はディレ・ダワで雑貨屋（後述するワヒード氏の家のそばにある）を営んでいる [8/22,9/7 インタビュー]。

#### 【ディレ・ダワ】

**ワヒード氏**：1950年生まれ、66歳。イエメンのタイズ州ホジャリヤ地方出身の祖父が110

年前にディレ・ダワへ来た。父も自分もムハンディス（技師）。兄弟姉妹 5 人のうち自分だけがエチオピアに残った。カートは午後に毎日嘯む。

祖父の名はアハマド。110 年前にホジャリヤからディレ・ダワに来た。イエメンに妻を残し、息子 2 人（ワヒード氏の父とオジ）を連れて来た。当時イエメンは戦争で国が荒れていたからエチオピアに来た。祖父はここで石加工を学んで仕事にし、エチオピア人女性と再婚した。ディレ・ダワに来たのはジブチから近いからで、親戚がいたからということではない。祖父はディレ・ダワで死亡した。

父の名はムハンマド。祖父から仕事を学んだ。ディレ・ダワに 90 年住んだ後、イエメンに 10 年住んで、イエメンで死亡した。父は 3 回結婚をして、合計子供が 21 人いる。

ワヒード氏は生まれも育ちもディレ・ダワ。同母兄弟姉妹は本人も含め 5 人で、男 3 人、女 2 人。姉妹は UAE のアブダビとイエメンのホデイダに、兄弟 2 人はイエメンのサナアにいる。兄弟のうち 1 人はサウディアラビアに住んでからイエメンへ行った。ワヒード氏が末っ子で、エチオピアに残った。実母はアブダビのワヒードの姉妹のところで死亡した。現在母方のオバ（110 歳）が同居している。

アラビア語はイスラーム学校でも学んだ。アラビア語以外にアムハラ語、オロモ語、ソマリ語も話す。技術は父に学んだ。30 年前に結婚した。妻はハラル出身のインド系。家族の間ではアラビア語で会話をする。国籍はエチオピアにした。

子供は 7 人で娘 6 人息子 1 人。息子は 18 歳で大学生。娘 3 人は既婚で、一番下の娘は小学生だ。上の娘は嫁いでサナアのハーイル通りにいる。2 年前に初めてイエメンに行った。バーブルヤマン<sup>11</sup>には行けたが、政情不安だったためにホジャリヤには行けなかった。毎晩、イエメンにいる親戚に電話をかけて安否を確認する。

自分はここが故郷だから住んでいる。メンギスツ<sup>12</sup>の時まで、この通りはみなうちのものだった。このころイエメン人はイエメンやサウディアラビアへ去った。イエメンの家で残ったのはうちとハーシミーだけだ。ハーシミーは近所でハラーワ（アラビア風の甘味）を作って売っている。父は死んで息子の代になった。ハーシミーはサイドだ。

カートは毎日マブラズ<sup>13</sup>で友人たちと一緒に嘯む。カート商人のタウフィークが持ってくるカートを買う。カートの時は水とジンジャーティーを飲む。体調が悪いので、コーヒ

---

11 サナア旧市街の南にある門のことだが、サナア旧市街を訪問したということ。娘の住むハーイル通りはサナア旧市街から西にある、新しい地区。イエメンの企業家ハーイル・サイドにちなむ。

12 デルグ政権時代を代表する政治家。1977-87 年に臨時軍事行政評議会議長、1987-91 年にエチオピア大統領を歴任した。

13 カートを嘯むための個人宅の部屋を意味するアラビア語。友人に開放されるが、入口に看板などはないので、あかの他人がふらりと立ち寄ることはない。女性もカートを嘯むが、女性の集まる場所はマブラズとは呼ばない。サナアでは男性の集会はジャリサ、マクヤルなど、女性の集会はタフリタと呼ばれるが、マブラズという表現は使わない。紅海沿岸のホデイダではマブラズは meeting place の意味で使われる [Piamenta 1990: 26]。

ーと紅茶はやめて自家製のジンジャーティー（無糖）を飲むようにした。好きなカートはウラタ。父の代からカートはディレ・ダワにあった。当時はハラルから馬で運んだのだろう[8/25,26,27 インタビュー]。

**イード氏**：ハラリの詩人。両親はかつてアデンへカートを売る仕事をしていた。ワヒード氏のマブラズに 20 年出入りしている。アラビア語、アムハラ語、オロモ語、ソマリ語、アムハラ語、ハラリ語を話す[8/25,26 インタビュー]。

**タウフィーク氏**：オロモのカート商人。兄と一緒に店舗でカート売る。妻もオロモ。子供 6 人。数年前からワヒード氏にカートを売るようになり、マブラズに出入りするようになって 2 年になる[8/29 インタビュー]。

**マブラズの様子**：ワヒード氏の自宅にある、午後にカートを噛むためにワヒードの友人が集まる部屋。門に近いところにあり、奥にある他の家族が居住する建物と離れている。ワヒード氏の父はカートを噛まなかったが、人々が集まるためにこのマブラズを始めた。当時からイエメン人に限らず、いろいろな人が集まった。かつてはディレ・ダワにマブラズがいくつかあったが、主催者が死ぬなどして現在はこのみが残っている。

現在このマブラズに来る人で最も古い人はイード氏で 20 年前からである。イード氏やタウフィーク氏の他に香水商、電気工、スイカ売り、モバイル修理工などが集まる。職業や年齢は多様であるが、ほとんどがエチオピア人である（筆者の観察中にやってきたイエメン人は 1 人のみ）。歓談する者が多いが、一人でスマートフォンをいじっているだけの者、部屋の奥でパソコンを開きカートを噛みながら仕事をするだけの者、カートは噛まずに歓談だけして去る者など、参加の仕方は多様である。

みなアラビア語を話す。他にアムハラ語、オロモ語、ソマリ語、ハラリ語ができ、会話の言語はよく変わる。ディレ・ダワに住む男性の多く（特に商人）は 5-6 語できる。

## 4. 考察

### 4-1 インフォーマントに関して

今回の調査ではハドラミでもなくサイドでもないインフォーマントから話が聞けた。筆者がそれを望んでいたのは確かであるが、インフォーマントから聞く限り、現在ジンマ、ナザレト、ディレ・ダワに残っているサイドは多くないようである。サイドが自らのネットワークを使ってエチオピアを去ったのかどうか定かではないが、少なくともサイドばかりに注目してきた先行研究とは大きく異なる。

インフォーマントにハドラミも少なかった。これはエチオピアに来たイエメン系移民の中でハドラミの割合が少なかったのか、それとも現在残っているイエメン系移民のうちハ

ドラミ以外が多いのか不明である。サイド同様に、インド洋海域にネットワークを持つだろうハドラミは、迫害の続いたエチオピアに見切りをつけて去ってしまったのかもしれない。

以上のように推測するのであれば、現在のエチオピアのイエメン系移民は、頼りにすべきネットワークもなくエチオピアにやってきて、去ることなく残ったということになるだろう。広大なインド洋をもものともせずに行き来するハドラミはこれまでの先行研究で描かれてきたものであるが、その地を動けない、むしろ動かないというのも移民の選択肢であり、生き方である。サイドはその知識やカリスマを求められその地にやってきたということもあるが、非サイドの移民の理由は「イエメンでは食べていけないから」「貧しかったから」というものである。サイドであれば当然獲得できる尊敬の念もなく、エチオピア人が軽蔑するような職業から始めて今に至る。自営業を営んでいるイエメン系移民が多かったが、このことから単純にアラブ人は商人だとか、イエメン系移民は商売がうまいというのは無理があるだろう。

ネットワークに頼らずにエチオピアに来て 100 年以上が経過し、3 世代目、4 世代目の時代になった。他のアラブ諸国だけでなく、欧米諸国にも彼らなりのネットワークが広がっている。しかし聞き取り調査の限り、彼らとの往来が頻繁に行われているというわけではない。国境が引かれパスポートによって国籍が明確になり（エチオピアは二重国籍を認めない）、さらには政権や政変によって政情は不安定になる。グローバル社会とはいえ、移動の自由が 100 年前から進んでいるというわけではない。むしろ 20 世紀中ごろに、エチオピアでの迫害からイエメンに戻ったりサウディアラビアに出稼ぎに行ったりしていた時代の方が、移動の自由度はあったといえる。

エチオピアのイエメン系移民の日常的な付き合いはエチオピア人ばかりである。ジンマのアハマド氏のレストランの客のほとんどはエチオピア人であり、雇っている者もエチオピア人である。ナザレトのイエメン系移民たちも、客としてやってくるのはエチオピア人ばかりである。アブドルカリーム氏とアリー氏が雇っているのはオロモの少年で、イスマーイール氏と父の店で雇っているのもエチオピア人である。ディレ・ダワのワヒード氏のマブラズに集まるのもエチオピア人ばかりである。

エチオピアに住むイエメン系移民同士の交流がないわけではない。ある程度の情報を共有していることから、交流があることは明らかである。しかし彼らがイエメン系移民との交流をことさら重要視しているわけではない。イエメン系移民だけの交流だけでは済まないほどにイエメン系移民が少ないのが現実だが、少なくともディレ・ダワでは昔からイエメン人だけがたまって生活していたというわけではなさそうである。

長く続いたイエメン系移民に対する迫害のため、ほとんどのイエメン系移民がエチオピアを去った。インフォーマントも、兄弟はみなあるいはほとんどエチオピアを去った者ばかりである。エチオピアに残った者に理由が多かったのが「母がエチオピア人だから」と

いうものである。そして母方の親族との交流も関係している。例えばワヒード氏は母方のオバを引き取って面倒を見ている。アリー氏は父系出自原理に基づくとエチオピア人だが、周囲の人も彼自身もイエメン系だと認識し、母方のオジと一緒に商売をしている。父系だけをたどりイエメン系を問うのはあまりに原理主義的である。

表現に関して説明を補いたい。インフォーマントのライフヒストリーで〇〇出身という表現を採ってきた。アラビア語で出身地を尋ねる時に用いるのは”*ayna bilādak* ?” (あなたの出身はどこですか) という表現である。アラビア語のビラードは出身地、故郷を意味するが、本人がそこで生まれて育ったところではなく、祖先が住んでいたところを意味する。サナアで尋ねれば、本人の出生地ではなく、祖先のいる／いたところが答えになる。今回の調査でイエメン系移民に「ビラードはどこか？」と聞くと、祖先の出身地つまりイエメンやイエメンの州や地方の名称が答えとして返ってきた。その答えから彼らがイエメン人のアイデンティティを保持していると断言するのは容易だろう。しかしその一方で、エチオピアに残った理由を尋ねると「ここが自分のビラードだから」とも使われる。彼らは2つのビラードを持つのである。

#### 4-2 カートとその他の嗜好品に関して

エチオピアとイエメンのカート消費方法の相違を以下の表にまとめた。この表のエチオピア式は、エチオピアに住むキリスト教徒もムスリムも共通に見られる方法である（ドアーはキリスト教徒のみ）。カートの消費方法を見ると、エチオピアのイエメン系移民はエチオピア式をとっている。イエメンにいるイエメン人は頬を膨らませるということはエチオピアでは周知のことである。カートを飲み込むか、片頬に溜めておいて最後に吐き出すのかという相違は大きい。片頬に溜めていくイエメン式は、エチオピアでは目立つ上にみっともないというニュアンスがあるのは、「イエメン人はカートを溜める」という話をする時の表情（キリスト教徒でもムスリムでも）からも明らかである。

イエメン系移民たちは「イエメンに行くとカートを溜める」というが、かつてイエメン式で噛んでいて、後にエチオピア式に変えたというわけではない。エチオピアではエチオピア式で噛んできたのである。カートの消費方法によってアイデンティティを保持することはなかった。

イエメンでは店番をしながらカートを噛む商人（男性のみ）が多いが、エチオピアではそのような人はどの都市でも見かけなかった。イエメンでは店主や店員は昼時に帰宅し、その後数時間は店を閉め、夕方から店を再開することが多い。自宅で昼食をとり、自宅やモスクで礼拝をするためである。エチオピアでは店主がムスリムでも日中は店を開け放しにする（食事や礼拝は交替で行う）。ナザレトのイエメン系移民たちはひっきりなしに来る客に対応するため、「カートを噛む暇がない」という。時間帯によっては客の少ないこともあるが、店先でカートを噛むことは非常にまれである（筆者の観察する限りナザレトのア

ブドルカーディル氏のみ)。

【イエメンとエチオピアのカート消費の比較】

【イエメン式】	【エチオピア式】
自分で噛むカートを持参する。	自分で噛むカートを持参する <sup>14</sup> 。
枝を左手に持ち、右手で葉を数枚摘み、すぐに口に運ぶ。	枝を左手に持ち、右手で葉を摘み、摘んだ葉を右掌に溜めていき、枝についている葉をすべて摘んでから、一度に口に入れる。
咀嚼しつつ、右手は葉を口に運び続ける。	時間をかけて咀嚼する。
咀嚼した葉は片方の頬に溜め、最後に吐き出す。	咀嚼した葉を飲み込む。
ひっきりなしに右手は葉を口に補給する。	別の枝を手に取り、再び葉を摘み始める。
店番などをしながら噛む（男性のみ）。	店番をしながらカートを噛むことはない
ドアーは行わない。	キリスト教徒の場合は途中でドアー <sup>15</sup> を行う。
主に水（ミネラルウォーターや水道水）や炭酸水を飲む。コーヒーや紅茶は飲まない。	ミネラルウォーター以外にコーヒーも飲む。
カートと水分、タバコ以外は口にしない。	好みでカートを噛みながらピーナッツなどを食べる。

ナザレトのイエメン系移民たちは頻繁にカートを噛まない者もいる。アブー・イスマーイル氏は噛むのをやめ、イスマーイル氏とアリー氏は週末などたまには噛む程度である。カートを噛むにしても、ジンマのアハマド氏も、ナザレトのイエメン系移民たちも1人で噛んだり、身内と噛んだりする程度で、週末など定期的にイエメン系移民が集まり、カートを噛んで情報を交換し合うというようなことは行われていない。すでにコミュニティとして機能しないほどイエメン系移民の人口が減ってしまったということも関係しているが、それにしても少ないイエメン系移民同士がアイデンティティ保持のためにことさら意識的に集まるということはない。同郷だからという理由でカートを噛むイエメン系移民はいなかった。カートを噛むことがアイデンティティの保持につながったり、コミュニテ

<sup>14</sup> カートを持参するというのは両国で共通だが、購入方法が異なる。イエメンのカート市場ではカートに定価はなく、購入者は商人と多少の値段交渉が必要である[大坪 2013]が、エチオピアの場合、購入者は値段交渉はせずに金額を告げ、商人はその金額に見合う量のカート売る（もちろん鼻屑の客に多めに渡す）。

<sup>15</sup> ドアーはアラビア語由来の言葉。その場にいる1人がカートを噛むのをやめて祈願を唱え、他の人々は両掌を上に向けて「アーメン」という。数回続けた後、みなで握手をし合う。キリスト教徒のアムハラが行っているのを見たが、イエメン系移民は行わない。イエメンでもカートの最中にドアーをすることは見たことはない。



イの維持に役立ったりということはないのである。カートは個人的な嗜好品になった。

一方ディレ・ダワのワヒード氏のマブラズはイエメンのカート集會に似ている。ディレ・ダワではカートを投げて相手に与えることが行われていたが、これもイエメンでよく見られる。気の置けない友人とカートを噛み、噛まない人も排除しないという点もイエメンでは当たり前の光景である。毎日同じ時刻にテレビをつけてニュースやドラマを楽しむということもイエメンではよく見かける。しかし消費方法はエチオピア式であり、そこに集まるのはエチオピア人である。カートの持つ結衆の効果はディレ・ダワ以外のイエメン系移民の間では弱まっているが、ディレ・ダワでは民族を超えて發揮されている。

他の嗜好品も併せてみてみよう。カートも含めた嗜好品の比較は以下のとおりになる。

【イエメン人、エチオピア人、イエメン系移民の嗜好品の比較】

	イエメン人	エチオピア人*	イエメン系移民
カートを咀嚼した後に	溜める	飲み込む	飲み込む
よく飲む(紅茶／コーヒー)	紅茶	コーヒー	紅茶
喫煙率	高い	低い	低い
アルコール飲料	飲まない	飲む	飲まない

\*主にアムハラ（キリスト教徒）

エチオピアはカートとコーヒーの原産地と知られているが、どちらもイスラーム文化としてとらえられてきた。コーヒーはエチオピア南西部起源であるとされるが、コーヒーを煎じて飲む方法はムスリム・アラブ世界で始められ、エチオピアに「逆輸入」された。コーヒー・セレモニーはエチオピア国内のムスリムの宗教儀礼や精霊憑依儀礼の中で行われるだけで、長らくキリスト教徒から忌避されていたが、19世紀後半から徐々にコーヒーに対する嫌悪が薄れ、19世紀末にはキリスト教徒上層部の間でコーヒーの常用が始まり、20世紀以降、キリスト教徒の一般の人々にも広まるようになった[石原 2014-c: 96]。

コーヒーが世界に広まったのはイエメンのモカ港からであるが、現在のイエメンで日中飲まれるのは紅茶（砂糖入り）である。コーヒーは家庭によって寝起きに飲むだけで、日中は飲まない。この習慣はイエメン系移民にも残っているようである。

エチオピアのアムハラは午後にカートを噛み、夜にアルコール飲料を飲む。しかしイエメンではアルコール飲料を手に入れることはほぼ不可能であり、エチオピアのイエメン系移民はアルコール飲料を入手することは困難ではないが、飲まないようである。宗教の相違はかつてはカートやコーヒーであったが、現在はアルコール飲料によって明確になる。

## 5. 結論

エチオピアにはイエメン風の食べ物がいくつか入っている。ハニードというハドラマウ

トの肉料理。ミンディというタイズの肉料理。ハラワという伝統的な甘味。イエメン風の料理は多くのエチオピア人が認識しており、人気がある。

ジンマのアハマド氏の開いたレストランや、ナザレトのイエメン系商人たちの店や、ディレ・ダワのイエメン系移民の開いている甘味屋に来るのは、地元の人々であり、宗教も民族も関係ない。ナザレトにあるイエメン料理レストランにも行ったが（オーナーはかつてはイエメン系だったが、現在はエチオピア人）、ここも地元で人気のレストランであった。

しかしイエメン系移民には迫害された過去がある。長く続いた迫害で、ほとんどのイエメン系移民はエチオピアを去り、現在は各都市に数軒ずつ残る程度である<sup>16</sup>。

ロンドンにいるソマリ系男性は、カートを嚙むことでアイデンティティを保持している[ACMD 2005]。カートが結衆の効果を持ち、アイデンティティの指標として機能しているのである。エチオピアのイエメン系移民の中で、カートは個人の嗜好品になり、結衆の効果は薄れた。それを唯一発揮しているディレ・ダワでは、民族を超えて人々をつないでいる。先行研究のようにイエメン系移民だけを切り取り、親族ネットワークを描くことは可能であるが、マブラズに集う人々を見れば、その作業が無意味である。

迫害の続いたエチオピアに残った彼らの理由の多くは、「母のため」ということである。イエメン系移民の父と、エチオピア人の母を持つ彼らは、出自原理からも見た目もアイデンティティもイエメン系でありながら、母のためにエチオピアを選んだ。自分の妻もまたイエメン系であることにこだわらない。反対に出自原理ではエチオピア人でも、自他ともにイエメン系と認める者もいる。父系出自原理だけをたどるだけでは十分ではない。先行研究はアリー氏やワヒード氏のオバのような存在を見落としてきたのではないだろうか。

先行研究の多くは、イエメン系移民あるいはハドラミと呼びながらも、実はハドラミのサイドを主に注目してきた。先人の築いたネットワークがたとえなくとも、自身の血統とカリスマを背負って移民できたサイドと異なり、庶民は日雇いレベルで、何もコネもないところへ移住した。文字通りゼロからの出発だったのである。繰り返しになるが、その後やっとの思いで築いた財産は、帝政や社会主義政権の時代に容赦なく奪われ、ほとんどのイエメン系移民はエチオピアを去った。残ることを選び、そこで暮らすイエメン系移民が、現在は少数ながらも存在するが、そう遠くない将来的にいなくなることは十分ありえる。Manger のインフォーマントが、そして Manger 自身も「劣っている」とみなした人々である。「劣った」彼らに何の問題があるのだろうか。現地社会に溶けゆく過程にある彼らをこれからも追っていきたい。

## 6. 引用文献

ACMD (Advisory Council on the Misuse of Drugs) , *Khat(Qat): Assessment of Risk to*

---

<sup>16</sup> アデイス・アベバのイエメン系移民の人数は不明である。最近イエメン国内の政情が不安定のためにアデイス・アベバに避難しているイエメン人が増えている。

- the Individual and Communities in the UK*. London: British Home Office. 2005.
- Anderson, David, Susan Beckerleg, Degol Hailu and Axel Klein, *The Khat Controversy: Stimulating the Debate on Drugs*. Oxford: Berg. 2007.
- Bezabeh, Samson A. *Subjects of Empires Citizens of States: Yemenis in Djibouti and Ethiopia*. Cairo: The American University in Cairo Press. 2016.
- Freitag, Ulrike, *Indian Migrants and State Formation in Hadhramaut: Reforming the Homeland*. Leiden: Brill. 2003.
- Freitag, Ulrike & William G. Clarence-Smith, eds. *Hadhrami Traders, Scholars and Statesmen in the Indian Ocean, 1750s-1960s*. Leiden: Brill. 1997.
- Gebissa, Ezekiel, "Introduction." Gebissa, ed. *Taking the Place of Food: Khat in Ethiopia*. Asmara: The Res Sea Press. 2010-a. pp. 1-12.
- "Keeping Tradition and Killing Time: The Use and Misuse of Khat in Ethiopia." Gebissa, ed. *Taking the Place of Food: Khat in Ethiopia*. Asmara: The Res Sea Press. 2010-b. pp. 57-85.
- 石原美奈子、「序」、石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家：エチオピア 神々の相克と共生』、風響社、2014-a、1-13 頁。
- 「国家を支える宗教」、石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家：エチオピア 神々の相克と共生』、風響社、2014-b、25-87 頁。
- 「国家に抗う宗教」、石原美奈子編『せめぎあう宗教と国家：エチオピア 神々の相克と共生』、風響社、2014-c、89-156 頁。
- Lackner, Helen, *P. D. R. Yemen: Outpost of Socialist Development in Arabia*. London: Ithaca Press. 1985.
- Le Guennec-Coppens, Françoise, "Changing Patterns of Hadhrami Migration and Social Integration in East Africa." Freitag & Clarence-Smith, eds. *Hadhrami Traders*. 1997. pp. 157-174.
- Mains, Daniel, "Chewing and Dreaming: Youth, Imagination, and the Consumption of Khat in Jimma, Southwestern Ethiopia." Gebissa, ed. *Taking the Place of Food: Khat in Ethiopia*. Asmara: The Res Sea Press. 2010. pp. 29-56.
- Manger, Leif, *The Hadrami Diaspora: Community-Building on the Indian Ocean Rim*. New York: Berghahn. 2010.
- 大坪玲子、「イエメン・サナアにおけるカート消費の変化」、『日本中東学会年報』2005、20 巻 2 号、171-196 頁。
- 「誠実な浮気者：イエメンにおけるカート市場の事例から」『文化人類学』2013、78-巻 2 号、157-176 頁。

Piamenta, Moshe, "Mabraz." *Dictionary of Post-Classical Yemeni Arabic*. Leiden: Brill.  
1990.

## 7. 英文アブストラクト

### Qat and Yemenis in Ethiopia

OTSUBO, Reiko  
The University of Tokyo

Qat, whose leaves produce a stimulant effect, has been cultivated and consumed in Yemen and East Africa. It is said that qat has power to unite people by consuming together, and that qat can be an identity marker. The purpose of the research is to clarify how and why Yemenis in Ethiopia chew qat and with whom they associate by chewing qat.

Yemenis in Ethiopia had been oppressed first by the Ethiopian Emperors and the socialist government afterwards; many lost their posts and property and decided to leave Ethiopia for Yemen and other countries. Now there are several Yemeni families in each city, Jimma, Nazaret and Dire Dawa, where I conducted interviews with them.

The way to consume qat in Ethiopia is different from the one in Yemen; in Ethiopia qat is swallowed, and in Yemen qat is kept in one of the cheeks and spit out in the end. Yemenis in Ethiopia chew qat in the Ethiopian manner. Yemenis in Jimma and Nazaret do not chew qat with other Yemenis regularly to keep their identity as Yemenis. They chew qat just as their individual pleasure. In Dire Dawa one Yemeni has a room for daily qat chewing with his friends, which is like a qat party held in Yemen. It is Ethiopian people, however, who come to chew qat with him. Qat has power to unite people from different ethnic groups in the city.